



A 受身文を使う場合

1. 話者が、第三者の行為または出来事の影響を直接的・間接的に受けたことを表すとき  
(主語はふつう話者、または動作主よりも心理的に話者に近い人) →第3部3課

例・残り1分で相手チームの選手にゴールを入れられ、逆転された。

2. 主題についての情報を重視するため、動作主をはっきり言う必要がないとき  
(主題とともに動作主も大切な情報のときは「～によって」を使って示す。)

例・内容がわからない手紙を送られたらびっくりするのは当然だ。

・ベートーベンによって作曲されたこの合唱曲は、世界中で歌い継がれている。

3. 慣用的表現として、決まった語とともに受身の形だけで言う言い方のとき

例・バスに揺られる ・努力が報われる ・才能に恵まれている  
・魅力に引かれる ・悪夢にうなされる ・災難に見舞われる ・必要に迫られる

4. 自然にそのような気持ちになると言いたいとき：自発を表す文  
(心の動きを表す動詞を使う。)

例・どうしてあんな不注意なことをしてしまったのかと悔やまれる。

・この件については、国会での激しいやり取りが予想される。

B 使役文を使う場合

1. 強制

例・医者はその患者を即刻入院させた。

2. 許可・恩恵

例・勝手な行動はさせないぞという店長の態度には怒りを感じる。

・近所においしい魚料理を食べさせる店ができた。

3. 原因・誘発

例・これ以上親を悲しませるようなことをするな。

・この地震は大勢の住民に避難生活を余儀なくさせた。

4. 責任・放任

例・飼いが悪くて、かわいい小鳥を死なせてしまった。

・わたしの不注意で子供にけがをさせてしまった。

・野菜を腐らせてしまった。

5. 他動詞化

例・田中さんは声を震わせて、事件の様子をみんなに語った。

・妹は目をきらきらさせて、プレゼントの包みを開けた。

・いつかこのバイオリンできれいな音を響かせたい。

・夜遅く車を走らせて、海を見に行った。

C 使役受身文を使う場合

1. 強制されること

例・入社当時、課長に何度もあいさつの練習をさせられた。

2. 必然的感情・行為

例・今度の事件をきっかけに、わたしは報道のあり方を深く考えさせられた。

・このところずっと職場の人間関係に悩まされている。

練習1 ( )の中の漢字で始まる動詞を文章の流れに合う形にして、書き入れなさい。

1 わたしはばらの花の美しさに(①引 )、今年こそ見事なばらの花を(②咲 )  
みたいと思った。そこで、先日苗を(③買 )きた。しかし、結局虫に(④食 )、  
苗は枯れた。

2 卒業が(①迫 )いるのにまだ就職が決まっていない。母にこのことを(②話 )と、母は顔を(③曇 )、「あなたには相変わらず(④心配 )ね。でも、  
就職難では仕方がないね。」と(⑤言 )。

3 聖書には「右のほおを(①打 )たら、左のほおも差し出さなさい」とか「下着を取ろ  
うとする者には上着も(②取 )なさい」という意味のことが書いてあるが、わたし  
たちがこの聖書の教えを(③守 )のは難しい。社会には悪には悪で返す事件が多い  
し、下着を(④取 )た後、続けて上着も(⑤取 )ような災難も相次いでいる。  
それにしてもこの言葉には深く(⑥考 )。



練習2 \_\_\_\_\_の上に適当な助詞を書き、( )の中の動詞を文章の流れに合う形にして、書き入れなさい。

- 1 このところ仕事①\_\_\_\_\_ (②追う→ )、旅行する余裕などなかったが、やっと休暇が取れたので、この山里の温泉に来た。バス③\_\_\_\_\_ (④揺る→ ) 3時間、仕事のこと⑤\_\_\_\_\_ (⑥忘れる→ )、いい気持ちで外の景色を見ながらここまで来た。このところ部長⑦\_\_\_\_\_ 何度も書類の書き直しを (⑧する→ )、つらい思いをしてきたが、ゆっくり温泉に入っていたら、なんだか (⑨報う→ ) ような気分になった。
- 2 ある人に仕事①\_\_\_\_\_ (②する→ ) ために、お金を払うことを約束して (③雇う→ ) ことを「雇用」と言う。雇用する人を雇用主、(④雇用する→ ) 人を「被雇用者」と言う。両者の間には「雇用契約」⑤\_\_\_\_\_ (⑥交わす→ )。被雇用者が不当に (⑦働く→ ) 場合には契約違反になる。また、被雇用者⑧\_\_\_\_\_ 契約どおりに (⑨働く→ ) 場合に、雇用主は被雇用者⑩\_\_\_\_\_ (⑪辞める→ ) こともある。
- 3 夏目漱石の「吾輩は猫である」という小説は1905年1月から8月まで、雑誌『ホトトギス』に (①連載→ ) 小説である。竹やぶに (②捨てる→ ) 猫が、珍野苦沙弥という教師③\_\_\_\_\_ (④飼う→ ) ことになった。この猫が猫の目で (⑤観察する→ ) 人間や社会の姿がこの小説のテーマである。苦沙弥は実は夏目漱石自身で、彼は猫の目を借りるという手法で、社会⑥\_\_\_\_\_ (⑦批判する→ ) ののである。この痛快な風刺小説には、漱石の正義感⑧\_\_\_\_\_ (⑨感じる→ ) ものがあると評判になった。また、落語⑩\_\_\_\_\_ (⑪思う→ ) 語り口が笑いの文学として (⑫評価する→ )、読者の支持を得た。

まとめ 次の文章を読んで、文章全体の趣旨を踏まえて、[ 1 ] から [ 5 ] の中に入る最もよいものを1・2・3・4から一つ選びなさい。

大人になってから、大人としてやるべきことを、しっかりやることは、大人の快感かもしれない。ただ、それは、子どものじぶんを静かにさせて、しっかりやったということではないのかな。静かに [ 1 ] 子どものじぶんは、押し入れの中で、うらみがましい目で、大人のじぶんを見ているかもしれない。断言してみたい。じぶんとは、子どものじぶんである。大人のじぶんは、じぶんがつくったじぶんである。つくったじぶんよりも、じぶんのほうが、よっぽどじぶんのはずで。押し入れに [ 2 ]、さるぐつわ(注)をかまされて [ 3 ]、そいつは生きて足をばたばたさせている。

よし、言おう。言ってしまう。人間とは、子どものことである。

ぼくは、いろんな大人たちのことを理解するために、彼らひとりひとりを、想像上の中学の教室のなかに置いてみます。そうすると、いるんです、中学生の彼や彼女が。理屈の得意なおじさんは、口を [ 4 ] 大声を出して笑われているやつだったり、気取った女性は、見栄っ張りのおませさんだったり、なんか中学生の姿で [ 5 ] んです。いいやつもいるけれど、たいしては、たいしたやつじゃありません。むろん、じぶんも含めて、たいしたもんじゃない。たいしたことない中学生が、武器や飾りを身につけて、ちょいとえらそうにしてるだけです。笑っちゃいます、よくがんばってるんです、それだけ。

(糸井重里 ほぼ日刊イトイ新聞2010年11月3日「今日のダーリン」<http://www.1101.com/readers/2010-11-07.html>による)

(注) さるぐつわ：声を出さないように布などを口に入れて、後頭部で結びつけておくもの

[ 1 ]

- 1 している                      2 した                              3 された                              4 させられた

[ 2 ]

- 1 閉じこめても                      2 閉じこもっても                      3 閉じこめられても                      4 閉じこもられても

[ 3 ]

- 1 黙っても                              2 黙らせても                              3 黙られても                              4 黙らされても

[ 4 ]

- 1 尖って                                  2 尖らせて                                  3 尖られて                                  4 尖らされて

[ 5 ]

- 1 見えている                              2 見えていく                              3 見えてくる                              4 見てくる